和数考

郡司正勝

和数考

江苏工业学院图书馆
藏书章

郡司正勝

白水社

著者略歴
一九一三年北海道生。
早稲田大学卒。
早稲田大学名誉教授。
主要著書
『郡司正勝刪定集』（全六巻・白水社）他

和数考

一九九七年六月一〇日第一刷発行
一九九七年九月一〇日第三刷発行

著者 © 郡司正勝
発行者 藤原一晃
印刷所 株式会社理想社
発行所 株式会社白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部〇三（三二九一）七八一一
編集部〇三（三二九一）七八二一
振替 〇〇一九〇—五—三三二二八
郵便番号一〇一

松岳製本

ISBN 4-560-04633-6
Printed in Japan

二、二〇〇円

和数考

装幀＝松吉太郎

カバー画＝円通「須弥山儀図」

（神戸市立博物館蔵）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

目次

一の章 5
二の章 23
三の章 35
四の章 51
五の章 61
六の章 77
七の章 91
八の章 125
九の章 143
十の終章 161
算術の章 175
あと算 191

一の章

どうも一という字は数ではないのではないか。つねづね思うことがある。

一にはふたつの読み方がある。「イチ」と「ヒトツ」である。「イチ」は呉音だから外来読みである。漢音では「イツ」。

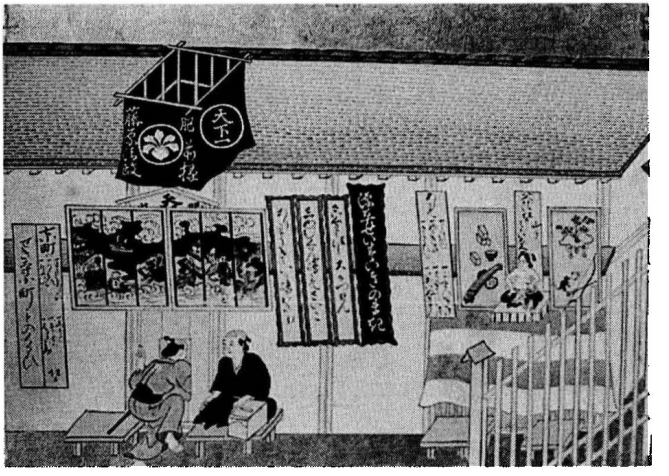
日本読みでは「ヒトツ」。「ヒト」あるいは「ヒ」と数えることがある。「ヒ」は日であり、火と同音である。

「イチ」と発音したとき、「いち早く」などは、「一番早く」で、あるいは「逸早く」かも知れないが、「一度いらして下さい」などというと、一度はいいが、二度と

は来るなということにはならない。しかも「二度いらして下さい」などとはいわない。一は、それだけで、二とは続かない。つまり数えられない「イチ」である。数字ではない「一」が日本にはあったことになる。つまり「お初にお目にかかります」とおなじで、『日本書紀』の御肇国天皇は「ハツクニシラススメラミコト」で、最初に国を治めたということになる。ところが、この称号をもつ天皇が二方あり、神武のほかに十代の崇神天皇をも「御肇国天皇」としたのは、この天皇のときに、天下が大いに治まったということを讃えたのである。だから「初め」は「一」ではない。「忠臣蔵」の六段目で、女衒（ぜげん）の源六が「ハナから云いなさりや」などというが、これも一度ではない。「初めから」である。

「一」には二が続かない一があるのである。「天下一」がそれで、「天下二」というのはない。この言葉は『信長記』にみえるから、戦国時代に、そのころ頻繁に用いられたのであろう。天下人のことである。

関白などのことを「一の人」あるいは「一人」などともいう。「一天万乗の君」と



江戸初期のかぶきや浄るりの興行物が，さかんに「天下一」を誇示した時代の産物。天下一の櫓幕。肥前掾藤原清政の浄るり小屋。（ボストン美術館蔵小屏風の部分）

おなじことで、これはまさに「天に二つの日輪なし」なのである。慶長・元和のころは、やたらに「天下一」を名乗ることが流行した。出雲の阿国も対馬守となって天下一を名乗り、かぶき浄るりの太夫や職人までが、これを称した。『武江年表』によれば天和二年には、諸職人浄瑠璃語の「天下一の号を停らる」とあって禁止されるに至った。『小笠原礼書』にみえる「一人上臈」というのも「お山の大将、俺一人」の意味で、田舎者を笑う言葉である。大岡裁きの立役者「天一坊」の事件は世間を驚かせたが、もしかしてこの「天一坊」も、「天下一」を名乗ろうとしたのではなかったか。天一坊が処刑されたのは享保十四年のことだと、朝倉無声は、年表に補筆した。

芝居の「志渡寺」の通称でとおる田宮坊太郎の仇討狂言で、殿様献上の桃を盗んだ罪で殺されようとする坊太郎の命乞いをする志渡寺の方丈が、

ハテお聞き入れなき時は、是非に及ばぬ傘一本、余人のお世話は頼み申さぬ。

というセリフがある。

この傘一本も二本とはいわない。一傘は一山の象徴である。一山の寺院の運命を賭

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

けてという意味なのである。古式の祭礼に「一つもの」というのがある。これも二とは続かないものである。普通は、同一のものの意味だが、特殊なものを指す、つまり神の依代、招代のことで、物でも人でもいい。

春日若宮の祭礼の行列では、稚児が白馬に乗って出るのをいう。兵庫の高砂の曽根天満宮祭や越前若狭の「一つ物」などがある。「一つ松」というのもおなじで、一本松であっても数の「一つ」ではなく、神聖な「一つもの」なのである。

この神聖な「一つもの」を「いちもつ」（一物）と読めば、大分あやしくなる。「胸に一物ありげなる様子」（『断腸亭日乗』）はまだしも、「例の一物」ということになり、男性の唯一のシンボルのことになる。『宇治拾遺物語』（巻九ノ一）に、男性の一物が消えてなくなってしまう妖しい話が載っている。これは一人に二つとないものであるが、「逸物」とかけば、すぐれものだが、狩り場の鷹や犬のことをいうことがあるが、馬の逸物というと、人間のを連想するからおかしい。一には逸の同一性格があるのかも知れない。

ところが「一物作り」となると、またちがう。かぶきの「菅原伝授手習鑑」で、賀の祝の白太夫が「鋤、鍬まで楽々と、遊びがちなる一物作り」といったときは、この国にとっては第一の作り物、穀物ということになる。

また芸能の世界で、「一枚看板」といっても、二枚看板とはいわない。ないのである。二枚看板というと怪しい商売となる。「二枚証文」も、これまた怪しい。芸者などが、売色を承諾する証文で、これらは、二の章に書くべきことであった。

また、逆にかぶきなども「二枚目」があるが「一枚目」はない。邦楽でもおなじで、一枚目に当るのは、「立物（たてもの）」といい、二枚目、三枚目と数えるのである。つまり一枚目は数に入らない「立物」なのである。

また「一夜漬」ということはいうが、二夜漬はない。つまり、「一」は後へ続かない。数に入らない数なのである。

それは日本の「一」は、「イチ」でなく「ひとつ」だからである。「ひとつ」の「ひ」は、「日」であり「火」だから、燃え上る状態、あるいは「ひを吹く」というよ

うに「息」（意気）のことで、『古事記』にみえる大和の葛城山の一言しかいわぬ一言主の神のように「ひとこと」が絶体世界で、「ひといき」の世界によって、その神の存在があり、二言の世界というのはあり得ない。つまり二言、二息となると、堕落したかたちで、はじめて人間の数の世界に入るのである。

近頃流行って事件となる「いっき飲み」もおなじことで、一気にやる、一気に飲むということだが、「ひと息」のことを、学生らしく漢語でいったもので、「ひとつとっちめてやろうか」「一丁かませるか」など、気を入れてやろうかの意で、指を折って数える世界のものではない。

大正時代に、「オイッチニ」という掛け声をかけてやって来たパン屋があったが、これは「一、二」と、兵隊の歩調の口唱歌で、「一、二の兵隊さん」で、一の上に「オ」がついたのであるが、この「オ」は、出足の、出発の気勢の音声化で、その丁寧語のような誇張が、滑稽味を帯びたのが身上であった。

「おひとついかが」「おひとつ飲まんせ」「一つ飲め」は、一杯だけ飲みませんかと

いう本当の数の一杯のことではない。いわば「ひとつ」は挨拶なのである。「ひとつ宜しく頼みます」のひとつで、「ひと風呂浴びよう」は、掛け声のようなものといってよい。

「人は一盛り」というとき、二度とはないことを指し、「一雨」「一時雨」も、「ひとしきり」で、「花に浮れて、ひと踊」、「一際見立つ」「一さし舞う」「ひと奏で」も数ではない。興がおこらなければ成立せぬ「ひト」なのである。

歌舞伎十八番の「助六」の「一つ印籠」「一つ前」もなぜ「ひとつ」といわねばならなかったか、一つ前は、着物を下着と一緒に合せて着ることで、鉄火さを指したが、二つ印籠を下げる馬鹿者はないわけなのに、わざわざ「一つ印籠」といったのは、この「ひとつ」に、語呂を負わせた江戸ッ子の意気の美学の矜恃がある。この「一つ」には、「男一匹」の誇りがあったわけである。

似た言葉に「裸一貫」がある。一貫は目方のことではない。通すという語だから、自分のからだ以外に元手とするものはない。裸身を張って通すしかないということで、

女にはまず使わないから、やや気負った言い方だが、「男一匹」と趣きを異にする。「裸一貫」は上方でもいいが、「男一匹」には江戸ッ子の俎(まないた)の鯉という風景がある。「一ぴき」には勢いがあって生(いき)がいい。「一かん」には覚悟があって重い。

「人は一代名は末代」の「一代」の場合も、「一代記」も、「一代奴」「好色一代男」などと用いると、「一生」がかかっており、「一念」が籠っていて、「二」はないのである。近松の浄るりなどにもよく出てくる「男の一分」も、数ではない。数えられないのである。重い「一」なのである。

たった「一夜」契ったために、娘の命を主君の命とつり替えねばならなかった悲劇が「弁慶上使」である。「一味」「一党」に加わったばっかりに「一切」を投げ出せねばならない人生もある。また「一念」の矢が石に立った故事もある。「百姓一揆」もおなじであろう。これは重い例だが、軽い場合もある。

能のワキがよく、「諸国一見の僧にて候」などといって登場するが、この一見は「一覧」でもいいのだが、「一興」に近い軽さをもっており、お茶や煙草の「一服」、

「一睡」に近い。

世に「一銭職」という職業があった。髪結いのことである。「髪結新三」（『梅雨小袖昔八丈』）のセリフに「一銭職と昔から下がった稼業の世渡りに」と、悪態が始まるが、髪結いは板前などと同じように渡り職人である。

九十代亀山天皇の御代に、長州下関へ流浪してきた北小路左兵衛尉基晴の三男は采女亮藤原基詮といい、髪結職となり店を張ったのを元祖とし、その七代の孫藤七郎が家康を助けた功による墨付を、享保年中の大岡越前守があずかったとある（『事物起原大辞典』）。この「一銭」は実数であっても、軽くて、重い。

さらに象徴的だと「一樹の蔭」「一蓮托生」「一陽来復」ということになる。

言葉には、勢い、リズム、生活感情がついている。

かぶきのセリフには、時代・世話という様式的ないい回し方がある。おなじ数の「一」でも「いち」と「ひとつ」の発音で、時代世話のちがいができて、世界までが

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c